

# インド説話「猿の生肝」を哲学する

## — śūnya-hṛdaya の語義解釈を中心に—

金 沢 篤

### はじめに

小学館の『日本国語大辞典（縮刷版）』（全十巻 1979-1981年）には、「猿の生肝」が立項されていて、以下のように説明がある。

「（生きた猿から取り出した肝の意で）世界的に流布している説話の一つ。病気をなおす妙薬といわれる猿の生き肝を取りに龍王からつかわれた水母（くらげ）が、猿をだまして連れて帰る途中、その目的をもらしたために、「生き肝を忘れて来た」と猿にだまされて逃げられてしまい、その罰として打られたため、それ以後水母には骨がなくなってしまったという内容のもの。」（第五巻 167頁）

なるほど、だが、これは、むしろわが国の昔話「くらげ骨なし」の直接的な説明に当たると言うべきで、今わたしが考えている「猿の生肝」説話とは、その「くらげ骨なし」のインド的原話である。猿と共に登場するのは、「水母」ではなく、水棲<sup>1</sup>の動物、通常は「ワニ／鰐」などと訳される動物の、しかも夫婦（鰐夫婦で鰐夫婦の夫を指すことにすれば話も早いかもしれない）である。そのインド説話の原話はむろん特定されていないが、インドでも仏典を含めて種々のヴァリエーションを以て、多様に語られるところの「ワニとサル」の<sup>2</sup>「猿

<sup>1</sup> 「水棲の動物」と言ったが、インド説話に限定しても、それがガンジス川といった「川」の場合と「海」の場合がある。いわゆる「鰐」は川のイメージだが、もしかしたら海に棲む鰐もいるのかも知れないが、わたしにはわからない。「海豚（イルカ）」は、字面からしても海のものだろうし、「鮫」も海か。いわゆる「摩竭魚」の場合も海がイメージされる。

<sup>2</sup> 辻・渡辺 [1956] では、『ジャータカ』全篇に三度語られる「猿の生肝」説話の二番目（第208話）が収録されているが、その際の表題がこの「ワニとサル」（109頁）である。

(2) インド説話「猿の生肝」を哲学する—*sūnya-hṛdaya* の語義解釈を中心に— (金沢)

の生肝」説話こそが、わたしの今の関心事である。岩本裕 [1963] では、「第一篇の四」「わが国の民話とインドの説話—「猿の生肝」から「くらげ骨なし」へ—」の箇所、かなり詳細に語られている<sup>3</sup>が、わたし自身の直接の関心は、その説話の伝承・伝播の実相に対しての比較文学研究的なものではなく、その一伝承形に過ぎない、インドの説話集『パンチャタントラ』所伝のその「猿の生肝」説話に現れるサンスクリット語の複合語 *sūnya-hṛdaya* の語義解釈という、きわめてトリヴィアルな文献学上の問題に向けられているのである。即ち鱈によって一時騙されて自身の命の危機にさらされた猿が、そこから抜け出すべくついた逆騙しの発言中で自身 (*aham:m.sg.nom*) の状態を形容する形容詞として捻り出された *sūnya-hṛdaya* [*-s:m.sg.nom*] という複合語の意味である。周知のように、その複合語を構成する *sūnya* も *hṛdaya* もインド文学やインド哲学の古典作品や仏典の中で重要な役割を担う語として散見するものでありながらも、その語義の決定は簡単ではなく、多くの場合、いわば誤解の温床となってきた観がある。両語は、常にわたし自身の文献学的関心の中心的な位置を占めてきた。ここ数年は、むしろ、この両語のことばかり考えて過ごしてきたとまで言えるような気がする。今回『パンチャタントラ』中の「猿の生肝」説話中に、この複合語が使われていることに、はたと気づき、改めてその語義を詮議してみようと考えた次第である。

*sūnya* という形容詞は、仏教のいわゆる「空の思想」を体現する極めて重要なものであるが、わたしにとって、*sūnya* という形容詞はとことん「空っぽの」「空虚な」という意味で、「無い」とか「不在の」という意味ではない。また、一方の *hṛdaya* は、基本的に、身体の中のアートマン *ātman* の住居たる身体の一部としての臓器、即ち英語圏ではハート型をした「心臓」ハート *heart*、古典インド世界では、蓮華の形状をした肉塊<sup>4</sup>としての「心臓」を意味している。

<sup>3</sup> 岩本裕氏にはこの岩本 [1963] の他に、その該当箇所をほぼそっくり含む (127-142 頁) 同趣旨の岩本 [1978] などもあり、また、それを踏まえている同傾向の本田義典 [2011] もあって参考になるが、わたしの本論攷とは別ものである。岩本氏は、『ジャータカ』所載の三つの「猿の生肝」説話 (後出 J57、J208、J342) を、猿に対する鱈夫の「騙し/謀り」発言を欠く J57 と持つ J208、J342 で A 系統と B 系統の二つに分類している。

<sup>4</sup> 金沢 [1991] [などを参照のこと。後出、『カターサリットサーガラ』の「猿の生肝」説

インド説話「猿の生肝」を哲学する—*sūnya-hṛdaya* の語義解釈を中心に— (金沢) (3)

様々なインド思想の中で、微妙な位置づけを持つ、いわゆる「こころ／心」*citta, buddhi, manas* などとの関係が常に問題となる、やはり難解至極の術語と言うべきである。

「猿の生肝」説話の〈猿の相方〉&〈生肝〉から『パンチャタントラ』の方へ

*sūnya-hṛdaya* の語義の詮議に入るに先立って、種々のインド説話「猿の生肝」の中で、猿の相方を務める鰐などの〈動物名〉と〈生肝〉の実質をなす内臓器としての「心臓」*hṛdaya* が実際にはどのような語を用いて表現されているかを、見ておきたい。

「ジャータカ」*Jātaka*(J)には、三話にこの「猿の生肝」説話を見ることが出来る。57「猿王本生譚」*Vānarindajātaka*、208「鰐本生譚」*Suṃsumārajātaka*、そして342「猿本生譚」*Vānarajātaka* である。その他、『マハーヴァストウ』*Mahāvastu*(Mv)、『カターサリットサーガラ』*Kathāsaritsāgara*(Kss)、『パンチャタントラ』*Pañcatantra*(Pt)の用例も知られており、それらを併せチェックした。「生きた猿の生肝／心臓を食べる」ことを廻る説話であることもあり、*hadaya-mamṣa* (*hṛdaya-māṃsa*:心臓の肉)、*hṛt-padma* (蓮華の形状をした心臓)といった表現に注目したい。また当然ながら、『パンチャタントラ』の「猿の生肝」説話などに出る、*svādu-hṛdaya* (美味しい心臓)や*susvādu-hṛdaya* (とても美味しい心臓)にも注目すべきか。

J57	「鰐魚」 <i>kumbhīla</i>	「心臓肉」 <i>hadayamamṣa</i>
J208	「鰐」 <i>suṃsumāra</i>	「心臓肉」 <i>hadayamamṣa</i>
J342	「鰐」 <i>suṃsumāra</i>	「心臓肉」 <i>hadayamamṣa</i>
Mv	「鰐」 <i>śuśumāra</i>	「心臓」 <i>hṛdaya</i>
Kss	「鰐」 <i>śiśumāra</i>	「心臓蓮華」 <i>hṛt-padma</i> 「心臓」 <i>hṛdaya</i>
Pt	「鰐／摩竭魚／海豚 <sup>5</sup> 」 <i>makara</i>	「心臓」 <i>hṛdaya</i>

---

話に用いられる「心臓・蓮華」*hṛt-padma* は、「蓮華のような心臓」、「蓮華の形状をした心臓」のことである。

<sup>5</sup> 猿の相方となる *makara* などの水棲動物に対して「海豚（イルカ）」と訳語を与えているものには、後出の松村 [1925] や高倉 [1929] の他に、ドイツ語訳として定評のある

(4) インド説話「猿の生肝」を哲学する—śūnya-hṛdaya の語義解釈を中心に— (金沢)

問題の『パンチャタントラ』は、ヴィシュヌシャルマン Viṣṇuśarman に帰せられる有名なサンスクリット語による説話集だが、その表題（「五巻の書」）が示す通り、多数の説話が、説話の趣旨・内容によって、以下の五つの巻名（ないし、それを体現する主話 *prastāvana-kathā*）の下に適宜配当されている。

巻 1：友の離反 (*mitra-bheda*)

巻 2：友の獲得 (*mitra-saṃprāpti*)

巻 3：鴉と梟の物語 (*kākolūkīya*)

巻 4：獲得されたものの消滅<sup>6</sup> (*labdha-pranāśa*)

巻 5：思慮なき行為者 (*aparīkṣita-kāraka*)

問題の「猿の生肝」説話は、巻 4 の主話「猿とマカラの物語 *vānara-makara-vṛttānta*」である。*vānara* とは文字通り「猿」のことで、*kapi* とか *markaṭa* という語もその同義語である。一方の *makara* というのがある意味、正体不明の水棲動物<sup>7</sup>であるが、この「サル」説話などでは、われわれ日本人にも馴染みの「鰐」などと訳されることが普通である。

### 『パンチャタントラ』の「猿の生肝」説話の śūnya-hṛdaya

さて、以下には、いよいよサンスクリット語で書かれた『パンチャタントラ』の「猿の生肝」説話を問題にするが、『パンチャタントラ』には種々の刊本があっ

---

Schmidt [1901] がある。Schmidt は、*makara* などに対して “Delphin” という訳語を与えている。Monier の梵英辞典の項目には、“m. a kind of sea-monster (sometimes confounded with the crocodile, shark, dolphin &c.; regarded as the emblem of Kāma-deva.....” (p.771) などとある。

<sup>6</sup> 巻 4 の冒頭部に置かれた以下の詩節が巻名とこの「猿の生肝」説話の趣旨を的確に説明するものとなっている。“*saṃutpanneṣu kāryeṣu buddhir yasya na hīyate / sa eva durgam tarati jalastho vānaro yathā //1//*” (Bühler [1891], p.1, ll.3-4) 「何かことが起った時、その者の知恵が失われないなら、／彼は困難を克服する。水の中の猿のごとく……」(田中・上村[1980] 347 頁) 本論攷とは直接の関係はないが、*buddhi* を「知恵」と訳しているのに、やや感銘を受ける。

<sup>7</sup> 中村元 [1988] 所載の拙文「摩迦羅 (摩竭魚) 一回心を迫る海獣」(243 頁) を参照のこと。

て、それぞれ微妙な差異を含んでいる。扱いても文献学的には、軽々にいかないのであるが、本論攷の目的・立場より、恣意的に田中・上村 [1980] の底本としての (i) (ii) (iii) の Bühler [1891]、該当箇所訳文を参照し得ない (i') (ii') (iii') の Kale [1912//2008]、Ryder [1925//1955] や宗 [1965] の底本としての (i'') (ii'') (iii'') の Hertel [1908] の三点に限った。また、わが国に流布している必ずしも典拠が明確になっていない重訳本やライト本の代表として、(1b) (2b) (3b) の松村 [1925] を参考までに並記した。「猿の生肝」説話中の重要な猿の発言 (i)、鰐夫の発言 (ii)、そして説話の最後尾に置かれた猿の発言 (iii) の三発言が、今回の検討の対象である。検討の対象を (i) (ii) (iii) に限定しているということは、通常の「猿の生肝」説話の実際の発端となる鰐夫による猿に対する「騙し／謀り」発言を問題にしていないということである。猿による自身が生き長らえる (= 殺されない) 為についた「逆騙し／謀り」発言のみを問題にしているということである。生肝を含む生き物の肉を日常的に食している現代の日本人には痛くも痒くもないかも知れぬ「猿の生肝」説話全体の詳細な顛末は、あちこちで容易に参照出来る筈の説話そのものに当たられたい。本論攷に於けるわたしの関心は、まぎれもなく「生肝／心臓」を指す hṛdaya とそれを形容する形容詞の sūnya の語義の詮議にのみ向けられているのである。

(i) vānara āha / bhadra yady evaṃ tat kiṃ tvayā mama tatra<sup>^</sup>eva na vyāhṛtaṃ yena sva-hṛdayaṃ jambū-koṭāre sadā<sup>^</sup>eva mayā suguptaṃ kṛtaṃ tad-bhrāṭṛ-patnyā arpayāmi / tvayā<sup>^</sup>ahaṃ **sūnya-hṛdaya**<sup>^</sup>atra kasmād ānītaḥ / (Bühler [1891]<sup>8</sup>, p.4, ll.9-11)

(i') pratyutpanna-matir vānara āha — bhadra yady evaṃ tat kiṃ tvayā mama tatra<sup>^</sup>eva na vyāhṛtaṃ yena sva-hṛdayaṃ jambū-koṭāre sadā<sup>^</sup>eva mayā suguptaṃ kṛtaṃ tad

<sup>8</sup> ここで問題にしている (i) から (iii) までのサンスクリット文は、田中・上村 [1980] の底本であるということから、Bühler [1891] より引いているが、例えば、Kale [1912//2008] の (i') から (iii') とほぼ一致している、問題となっている hṛdaya、sūnya-hṛdaya の解釈に関しては、何ら支障はないと考える。Bühler [1891] の (iii) との齟齬は、その“dhiṅ-mūrka” が “**dhig**-dhiṅ mūrka” に、“tad gamyatām” が “tad **āsu** gamyatām” になっている二点のみである。

(6) インド説話「猿の生肝」を哲学する—śūnya-hṛdaya の語義解釈を中心に— (金沢)

bhrāṭṛ-patnyā arpayāmi / tvayā^aham śūnya-hṛdayo^atra kasmād ānītaḥ / (Kale [1912//2008], p.192, 1.24-p.193, 1.2)

(i'') tataḥ pratyutpanna-matir [vānarah] prāha / bhadra / yady evam / kiṃ tvayā tatra^eva mama na kathitam / yena jambūkoṭāra-antarasthāpitaṃ susvādu-hṛdayaṃ saha^eva samāneṣyam / tad vṛthā^aham svādu-hṛdayena vinā śūnya-hṛdayo^atra^ānītaḥ / (Hertel [1908]<sup>9</sup>, p.230, ll.19-21)

(1a) Then the quick-witted [monkey] said: “If that is the case, sir, why didn't you tell me on shore? For then I might have brought with me another heart, very sweet indeed, which I keep in a hole in the rose-apple tree. As it is, I am **forlorn in this heart**<sup>10</sup>, at being taken to her in vain, without my sweet heart.” (Ryder

<sup>9</sup> (i') から (iii') までのサンスクリット文は、宗 [1965] の底本とされるものである。宗氏は、「訳者序」の中で「・・・今此処に訳出するテキストは之と異なり、紀元一九九年の日附を有し、耆那僧 Pūrṇabhadra Sūri が大臣 Soma の命によって従来の写本を校訂し、増広、加筆して改作したものと知られ、その原名は Pañcākhyānaka と称せられる伝小本である。西欧の学者によって Textus ornatior の名の下に重視されているもので、此のテキストでは第一書乃至第三書に於ても物語や詩句の数を増しているのみでなく、古写本タントラーキヤーイカではどう見ても散佚を想定せざるを得ない第四、第五書中にも、多くの物語と金言詩が附加されて遙かにまとまった体裁を有するものである。・・・<中略>・・・かのヘルテルは此のテキストの批判的なよき出版を完成しており、独逸の他の研究者 Schmidt の手によってそのドイツ語訳が出されている。」と記している。『パンチャタントラ』の「猿の生肝」中の、śūnya-hṛdaya の語義を明らかにする上で、Bühler [1891] よりも遙かに説明的な叙述を含むこの Hertel [1908] は、きわめて有用である。Hertel 本は、「美味な心臓」 svādu-hṛdaya と、それと明らかに異なる「空っぽの心臓」 śūnya-hṛdaya の二つの心臓があると明記しているのであり、鰐夫によって水上に連行された猿の胸中にある心臓は「空っぽの心臓」であり、樹の洞に秘かに隠し持っていて通常は持ち歩かない第二の心臓たる「美味な心臓」も所有していると鰐夫に思い込ますのに成功して、辛くも窮地を脱したのであった。だが、最後に笑って鰐夫に告白する通り、「誰に抑も第二の心臓があるものか」。また「空っぽの心臓」に、どんな効能があらう。したがって「空っぽの」という形容句は、まさしく虚偽である。

<sup>10</sup> Ryder [1925//1955] の “forlorn in this heart” が問題の “śūnya-hṛdaya” の訳語に相当するものと考えられるが、猿の現在所持する心臓を廻る某かの様態、例えば、シャクンタラー姫がいなくなって「森が空っぽになってしまった」といった猿自身の寂寥感に即した訳文と好意的に考えるべきかも知れないが、結局のところ Ryder の真意は不明である。

[1925/1955]<sup>11</sup>, p.386)

- (1b)『それは残念なことをした。さういふつもりだったら、なぜ私たちがまだ海端にみるときに、さう話してくれなかつたんです。私はいつもあの樹の洞の中に心臓をしまっておくんですよ。それはもうお前さんと私とは兄弟のなかだから、お前さんのつれあひが、私の心臓が欲しいといふことなら、喜んで上げますよ。しかしそれを持つてゐない時に、つれ出されたんでは困つてしまふな。』／と、**猿**が云ひました。」(松村達雄 [1925]<sup>12</sup> 515 頁)
- (1c)「そこで敏捷な心をもつ**猿**は言った。／「兄弟よ、もしそうならば、どうしてあそこで実に私にそれが語られなかつたか、なぜとって、そうすりゃ木の洞の中においてある美味な心臓を一所に実に携えて来れた筈だのに。だから私は喜んで<sup>13</sup>美味な心臓を持たずに心臓が空っぽで此処へ連れて来られた」(宗茅生<sup>14</sup> [1965] 275 頁)
- (1d)「**猿**は言った。／「友よ、もしそういうことなら、どうしてあの場でそれを言ってくれなかつたのか。私は自分の心臓をいつもあのジャンプ一樹の穴の中に隠してあるのだ。それを兄弟の奥さんに進呈するよ、心臓の無

<sup>11</sup> この Ryder [1925//1955] の英訳の底本は、“Translator’s Introduction”、及びその内容から宗 [1965] と同様の、Hertel [1908] であろう。今の問題の śūnya-hṛdaya の訳は、おそらく “forlorn in this heart” とあって、その解釈は必ずしも明確ではない。

<sup>12</sup> この書物は松村達雄氏の名前と結びついているが、その『パンチャタントラ』の文の書き手は必ずしも明確ではない、サンスクリット文からの直接の和訳とは考えられないが、時期的に見て、その「猿の肝取りの話」を紹介しておきたい。高倉輝 [1929] の「一九猿と海豚の話」は、明らかに、この松村 [1925] の説話を踏まえているように思われる。どちらも、猿の名前 raktamukha、鱈夫の名前 karālamukha を「ラクトアムカー」、「カララムカー」と表記している。

<sup>13</sup> 宗訳にある、この「喜んで」がまことに不可解である。

<sup>14</sup> 宗茅生氏は、「あとがき」の中で、「今にして反省すれば、きびしい言語学的な訓練を受けた私の傾向から、現代の要請である平明暢達な訳文というわけには行かなかつたのは蔽うべくもないが、此の書がその起源を千数百年の昔にもつ大古典であることに鑑み、寧ろ一字一句も増減変改せず、邦訳の許すぎりぎりの直訳を企て、日本的な解釈や変容を排し、以て原典のもつ印度臭を少しでも忠実にうつし出して、もっぱら青年や成人の読み物として此の印度説話文学の訳著を提示しようと思ったのである。」(宗 [1965] 350-351 頁) と記している。

(8) インド説話「猿の生肝」を哲学する—*sūnya-hṛdaya* の語義解釈を中心に— (金沢)

い私<sup>15</sup>をつれて行っても仕方ないだろう」(田中於菟弥・上村勝彦[1980]<sup>16</sup> 352頁)

(ii) tad ākarṇya [makaraḥ] sānandam āha / bhadra yady evaṃ tad arpayā me hṛdayaṃ yena sā duṣṭa-patnī tad bhakṣayitvā<sup>^</sup>anaśanād uttiṣṭhati / ahaṃ tvāṃ tam eva jambū-pādapaṃ prāpayāmi / (Bühler [1891], p.4, ll.11-13)

(ii) tad ākarṇya [makaraḥ] sānandam āha — bhadra yady evaṃ tad arpayā me hṛdayaṃ yena sā duṣṭa-patnī tad bhakṣayitvā<sup>^</sup>anaśanād uttiṣṭhati / ahaṃ tvāṃ tam eva jambū-pādapaṃ prāpayāmi / (Kale [1912//2008], p.193, ll.3-4)

<sup>15</sup> ahaṃ *sūnya-hṛdayaḥ* に対して、田中・上村 [1980] は、「心臓の無い私」と訳している。訳者は、これを前提にした上で、後に「心臓が二つある」と訳すことに戸惑いを覚えないのであろうか。訳者は、『パンチャタントラ』の語り手／作者が当然のように前提としている  $1+1=2$  をどう考えているのだろうか。この用例からしても、*sūnya-hṛdaya* が「心臓がない」、「心臓が存在しない」という意味ではないことが明白であろう。

<sup>16</sup> この田中・上村 [1980] は、屢々和訳に大いに問題があるとしても、Bühler [1891] を底本とした全和訳という点で、有用なものである。田中氏、上村氏の共訳の実態にも興味が湧くが、「はしがき」には「この翻訳は最初の部分（第一・第二巻）は田中が、後半（第三～第五巻）は上村が担当した。最初の計画では、訳文が完成したら両人が通読して訳文を統一し、註釈も整理する予定であったが、前半を担当した田中が遅筆のため、重複した詩句や註釈を整理するには、なお多くの時間を要するので、結局前半と後半は全く別個のものとなってしまった。・・・」（1頁）とある。したがって、この「猿の生肝」（「猿の心臓をとりそこねた鰐」）の訳文は、上村勝彦氏のものと考えられる。上村 [1978] に於ける *sūnya-hṛdaya* の、和訳者の上村勝彦氏の解釈に関しては、既に別の処に詳細に論じた（未刊）。なお上村氏には、この「猿の心臓をとりそこねた鰐」の物語（『パンチャ・タントラ』第四巻主話より）を含むエッセイ（初出不明）があり、それが没後刊行の上村 [2004] に収録されている（152-157頁）。末尾に『『パンチャ・タントラ』のテキストは、ボンベイで出版された「小本」を使用しました。わかりやすく意識しましたが、できるだけ原文にそっています。」（157頁）とあるように、言葉使いにはかなり修正があるものの、基本的には、田中・上村 [1980] 所載のそれとほぼ重なるようである。問題の *sūnya-hṛdaya* を含む (1d) の相当部は「猿は考えてから言った。／「友よ、もしそういうことなら、どうしてさっきあの場で言ってくれなかったのか。私は自分の心臓を、いつもあの果実のなる樹の穴の中に隠してあるのだ。それを君の奥さんに進呈するよ。心臓のない私をつれていっても、しかたないだろう」（155頁）であり、その理解・解釈に進展はないようである。



インド説話「猿の生肝」を哲学する—sūnya-hṛdaya の語義解釈を中心に— (金沢) (9)

(ii'') tac chrutvā **makarah** sānandam āha / bhadra / yady evam / tad arpayā me tad eva hṛdayam / yena sā duṣṭa-patnī tad bhakṣayitvā tv anaśānān nivartate / ahaṃ ca tvāṃ ca tam eva jambū-pādapaṃ prāpayāmi / (Hertel [1908], p.230, ll.21-23)

(2a) When he heard this, the **crocodile** was delighted and said: "If you feel so, my friend, give me that other heart. And my cross wife will eat it and give up starving herself. Now I will take you back to the rose-apple tree." (Ryder [1925/1955], pp.386-387)

(2b) 「**海豚**はさう聞くと、大層喜んで、／『それぢゃ、もう一度お前さんをあの樹のところへ連れて行くから、どうか心臓を渡しておくれ。私の妻はどうも悪い奴だが、とにかくそれを食べさせて、断食を思ひとませたいから。』／と云ひました。」(松村 [1925] 515 頁)

(2c) 「それをきいて、**鱶**は喜びを以て言った。／「兄弟よ、もしそうならば、そんなら私に実にその心臓を投げてよこさない。それによって彼女悪い妻がそれを食べてでも、断食から立直るために、そうして、私は汝をば実にあのジャムブー樹のところへ連れて行こう」(宗 [1965] 275 頁)

(2d) 「それを聞くと**鱶**は喜んで言った。／「友よ、そういうことなら私に心臓をくれ給え。そうすればあの悪い妻は、それを食べて断食をやめるだろう。私は君をあのジャンブー樹につれて行くよ」(田中・上村 [1980] 352 頁)

(iii) atha vihasya nirbhartsayan **vānaras** tam āha / dhiṅ-mūrkhā viśvāsa-ghātaka kiṃ kasya cid **dhṛdaya-dvayaṃ** bhavati / tad gamyatām / jambū-vṛkṣasya^adhastān na bhūyo^api tvayā^atra^āgantavyam / (Bühler [1891], p.4, ll.22-24)

(iii') atha vihasya nirbhartsayan **vānaras** tam āha — dhig-dhañ mūrkhā viśvāsa-ghātaka kiṃ kasya cid **dhṛdaya-dvayaṃ** bhavati / tad āśu gamyatām / jambū-vṛkṣasya^adhastān na bhūyo^api tvayā^atra^āgantavyam / (Kale [1912//2008], p.193, ll.13-15)

(iii'') atha vihasya nirbhartsamāno **markaṭa** āha / dhig mūrkhā / viśvasta-ghātaka / kiṃ kasyacid **dhṛdayaṃ dvitīyaṃ** bhavati / tad gamyatām svasthānam / asya jambūvṛkṣasya^adhastān na punar āgantavyam / (Hertel [1908], p.230, ll.31-33)

(10) インド説話「猿の生肝」を哲学する—śūnya-hṛdaya の語義解釈を中心に— (金沢)

(3a) Then the monkey laughed, and scolded him, saying: “You fool! You traitor! How can anyone **have two hearts**? Go home, and never come back under the rose-apple tree……” (Ryder [1925/1955], p.368)

(3b) 「・・・猿はあざ笑つて、／『何をいふんだい、裏切ものめ、正真正銘の馬鹿者め、**心臓を二つなんか持つてるものが**、どこの世界にあるものかい。とつとど歸つてもらはう。そして二度とふたゝびこの樹の下に来ないやうにしておくれ。』／と云ひました。」(松村 [1925] 516 頁)

(3c) 「その時、笑つて嘲りつ猿が言った。／「失せろ、この愚か者、信用している者を滅ぼす者よ、誰に抑も**心臓が二つもあるものか**<sup>17</sup>、だから自分の棲処へゆけ、このジャムブー樹の下へ再び来てはならぬぞ」と。」(宗 [1965] 275 頁)

(3d) 「すると猿は笑い、鰐をなじつて言った。／「やい、馬鹿め。裏切者、誰に**心臓が二つあるものか**。ジャンブー樹の下から立去り、もう二度と歸つて来てはいけない。・・・」(田中・上村 [1980] 353 頁)

細かな検討は省くにしても、『マハーヴァストウ』の「猿の生肝」説話は、猿の鰐夫に向けての最後の捨て台詞<sup>18</sup>の中に、問題の śūnya-hṛdaya に匹敵するよ

<sup>17</sup> 宗氏の訳の底本が、(iii<sup>17</sup>) であるとしたら、正確には、「誰に抑も**第二の心臓**があるものか」となるべきであろう。

<sup>18</sup> 『マハーヴァストウ』の記述を少し引いたので、その関連でわが国に伝わる「猿の生肝」説話のうち、有名な『今昔物語』所伝のものを参考までに引いておこう。「巻第五 天竺付佛前」の第廿五「龜、為猿被謀語 (サルノタメニタバカラレタルコト)」が、それである。猿の相方が、鰐ではなく龜となっている。「猿ノ云ク、**「汝ヂ、甚ダ口惜シ。我レヲ隔ルル心有ケリ。未ダ不聞ズヤ、我等ガ黨ハ本ヨリ身ノ内ニ肝無シ。只、傍ノ木ニ懸置タル也。汝ヂカシコニテ云マシカバ、我ガ肝モ亦、他ノ猿ノ肝モ取テ進テマシ。譬ヒ自ヲ煞シ給ヒタリトモ、身ノ中ニ肝ノ有ラバコソ其ノ益ハ有ラメ。極テ不便ナル態カナ」ト**」(山田孝雄他「1959」392 頁)の結果、窮地を脱した猿の最後の台詞の一部が、「龜、墓无シヤ。身ニ離タル肝モヤ有ル」ト・・・」(393 頁)である。『今昔物語』所伝の「猿の生肝」説話の賢い猿の「謀り方便説」(たばかり・ほうべんせつ)は、『パンチャタントラ』所伝の「心臓二つ ( $\boxed{1} + 1 = 2$ ) 説」ではなく、『マハーヴァストウ』同様の、心臓はなくとも生きれる「心臓 0 個 ( $\boxed{1} - 1 = 0$ ) 説」と言うべきか。むろん□に囲まれた 1 が勝義説、±1

インド説話「猿の生肝」を哲学する—*sūnya-hṛdaya* の語義解釈を中心に— (金沢) (11)  
うな、恰好の *a-hṛdaya*<sup>19</sup> が見られることでも、一瞥をくれておく必要がある。  
この『マハーヴァストゥ』の原文を『パンチャタントラ』の (i) (ii) (iii) に  
無理矢理対応させて、便宜的に (i'') (ii'') (iii'') とし、その訳例として平岡 [2004]  
のものより (1e) (2e) (3e) を附す<sup>20</sup> が、わたしが今回問題にするのは、(iii'')  
とその訳例 (3e) である。

(i'') *so dāni vānaro āha // vayasya mama hṛdayo udumbbare utkaṅṭhito sthapito yathā  
lahukataro samudraṃ tareyaṃ na ca atibhāro bhaveyāti / tad yadi te avāśyaṃ  
markaṭa-hṛdayena kāryaṃ tato nivartām tato udumbarāto taṃ markaṭahṛdayaṃ  
otāriyāna dāsyāmi // (Senart [1890], p.249, ll.10-13)*

(1e) 「・・・**猿**は言った。「友よ、私は心臓が心配で、無花果の木にぶら下げ  
てきたのだ。身軽にし、余分な重みがかからないように海を渡ろうと思っ  
てね。だから、もし君がどうしても猿の心臓を手に入れたいのなら、引き  
返そう。無花果の木から猿の心臓を降ろしてきて、[君に] 上げるから」と。」  
(平岡 [2010] 453 頁)

(ii'') *tasya dāni markaṭasya yathājalpantasya tena **śuśumāreṇa** pattīyitaṃ // so dāni  
**śuśumāro** taṃ grhṇīya tahiṃ pratinivṛtto kṣaṇa-antareṇa taṃ vana-khaṇḍa-  
pratyuddeśaṃ anuprāpto // (Senart [1890], p.249, ll.13-15)*

(2e) 「<そこで鰐は猿の言うことを信じた。その時、鰐は彼を連れてそこに引  
き返し、すぐに森のその場所に到着した。>」 (平岡 [2010] 453 頁)

(iii'') .....*so **vānaro** taṃ śuśumāraṃ gāthābhir adhyabhāṣe // vaṭṭo ca vṛddho ca hosi*

---

が謀り。「心臓はただ一個で、通常は、その心臓がなければ生きていられない」、「心臓よ、  
あなたなしにはわたしは生きていられない」である。また、わが国の『沙石集』巻五の八  
所伝の「猿の生肝」説話には、「《略》・・・我生肝はありつる山におけり。急ぎつる程に  
忘れたりといふ。・・・《略》・・・猿木に上りて、海中に山なし、身をはなれて肝なしと  
云ひて、山へふかく入りぬ。・・・《略》」(筑土 [1943] 220 頁) とある。

<sup>19</sup> *a-hṛdaya* という形容詞は、*an-ātman* などと同様に、「*hṛdaya* でない」と「*hṛdaya* を欠く」  
の両様の意味に解し得るが、今の場合は当然「*hṛdaya* を欠く」、即ち「心臓を欠く」「心臓  
がない」の意味である。

<sup>20</sup> 岩本 [1963] にも、『マハーヴァストゥ』の「猿の生肝」説話の全和訳が収録されている  
(90-96 頁)。

(12) インド説話「猿の生肝」を哲学する—*sūnya-hṛdaya* の語義解釈を中心に— (金沢)

prajñā ca te na vidyate /na tuvaṃ bāla jānāsi nāsti **ahṛdayo** kvaci // (Senart [1890], ii, p.249, ll.19-20)

(3e)「・・・**猿**は鰐に詩頌で語りかけた。／「丸々と太れるも、汝に智慧なし。愚者よ、**心臓を持たぬ者**など何処にもあらざるを汝は知らざるや。・・・」 (平岡 [2010] 453 頁)

そうである。『パンチャタントラ』の「猿の生肝」の中に現れる *sūnya-hṛdaya* という形容詞を、従来の研究者は皆、この『マハーヴァストウ』の中に現れる「心臓を持たぬ者」*a-hṛdaya* の意味で解釈しているのである<sup>21</sup>。ところが先にも見た通り、『パンチャタントラ』の「猿の生肝」説話の、猿の鰐夫に向けての最後の捨て台詞の中の箴言は、「誰に**心臓が二つあるものか**。」(*kiṃ kasya cid dhṛdaya-dvayaṃ bhavati*)、『マハーヴァストウ』の訳文に合わせて、換言すれば、「**心臓を二つ持つ者**など何処にもあらず」であった。既に明白であろう。水の中ないし水上の鰐の背にあって、絶体絶命の窮地に立たせられた猿が自らの状況を謀って告げる逆騙し(=謀り方便説)中の決定的な表現、“*aḥaṃ sūnya-hṛdayo*”の意味するところである。この *sūnya-hṛdaya* は、*a-hṛdaya* の意味するところとは、決定的に異なっているのである。*sūnya-hṛdaya* は「[わたしは、現在ただ今] 心臓を持たぬ者である」という意味などではない。そうではなくて、「[確かにわたしは今も] 心臓を持っているけれど、その心臓は空っぽの心臓である」という意味、即ち「[わたしは、現在ただ今] 空の心臓を持つ者である。

<sup>21</sup> この「従来の研究者」の中に、Monier Monier-Williams を数えなければならないのは誠に遺憾である。有名なモニエルの辞典の *sūnya-hṛdaya* の説明に、“heartless, Pañcat.” (p.1085) とあるのは、この用例を踏まえてのものであり、モニエルの与えた訳語としての「心臓がない”heartless”であろう。モニエルもカーレーと同じ解釈と考える他ない。さらに、有名な V.S.Apte の梵英辞典の *sūnya* の項目の中に立てられた *sūnya-hṛdaya* に対する「心が不在の”absent-minded, V.2” (p.1565) も考慮すべきかと思うが、これは「心臓 *hṛdaya* と「心」*manas* などの関係に基づく *sūnya-hṛdaya* である、「[心が不在で] 心臓が空っぽの」の省略的な訳語表現に過ぎないと指摘するに留める。やはり *sūnya* という形容詞の意味は「空っぽ」であって「不在の」ではない。Louis Renou などの梵仏辞典の *sūnya-hṛdaya* に対する“sans coeur” (p.736) も、用例の指示はないが、「心臓がない」との解釈を示している。やはり「空っぽの心臓がある」という意味である。

インド説話「猿の生肝」を哲学する—*sūnya-hṛdaya* の語義解釈を中心に— (金沢) (13)

わたしは、二つ心臓を持っているが、空でない＜味の＞第二の心臓の方は、樹の洞の中に置いてきた」ということである。むろん、これは虚偽の申告であり、真実は、「心臓を二つ持つ者など何処にもいない」ということである。

では、「空っぽの心臓」とはどういうことであろう。通常はこうした *sūnya-hṛdaya* というサンスクリット語の表現は、身体／肉体の一部たる内臓器としての「心臓」と、そこを占拠する、「精神アートマン *ātman* > ところ *manas*」の関係を顧慮して用いられる用語である。つまり「わたしは、空っぽの心臓を持つ」“*ahaṃ sūnya-hṛdayaḥ*” のように。いつもは、*hṛdaya* の中であって、人間存在の全体をみごとに統御している「精神アートマン *ātman* > ところ *manas*」が、どうしたわけか、現在は不在である。そういう状況を文学的に表現する際に、現れるものである。*sūnya* という形容詞が「空の」と「不在の」と二通りの意味を持つわけではないのだ。わたしは、未刊の拙論で、「嘘をつくのは名詞であって、形容詞や動詞は原則嘘をつかない」という私製箴言を披露したことを覚えている。仮にもし、あらゆる単語が嘘をつくのなら、言語表現など何であろう。だが、それに異議を唱えるかのように、インド思想表現に於ける重要な形容詞 *sūnya* に、ある意味で相互に鋭く対立する「空の」(有)と「不在」(無)の両義を認める者たちが少なからずいるのである。よもや、いわゆるサンスクリットに関しては、比類なきインドのパンディットたちにはおるまい、と秘かに考えてきたが、今回『パンチャタントラ』の「猿の生肝」中の用例 *sūnya-hṛdaya* の語義解釈を試みた折に、何と有名なカーレー先生 M.R.Kale は、その箇所の訳文は与えていないものの、以下のように、明確に註記しているのに遭遇したのである。まあ、英語を巧みに操るパンディットなどいるわけではないと考えるべきだったのかも知れない。

カーレー先生は、定評ある *śloka* 部の全英訳と詳細な訳註付きの『パンチャタントラ』、Kale [1912//2008] の中で、その用例を “*sūnyahṛdayaḥ—without the heart, not having the heart with me. sūnyam avidyamānaṃ hṛdayaṃ yasya.*” (p.445) とはつきりとコメントしている<sup>22</sup>。だが、先に見たように、むしろ

<sup>22</sup> この、形容詞 *sūnya* に対する Kale 風の「不在の、非存在の」との解釈は、各種梵語辞典の中にも時折見かけるものである。A [名詞] -*sūnya*-B [名詞] という複合語を頭にお

(14) インド説話「猿の生肝」を哲学する—*sūnya-hṛdaya* の語義解釈を中心に— (金沢)

“*sūnyahrdayaḥ—*with an empty heart, having an empty heart with me.” とコメントすべきだったのである。

では、二つの心臓、「空心臓」と「肉心臓」は、どのように考えればよいのか。二つの心臓のうちの一つ、「空の心臓」は、内臓器としての形ばかりの空っぽの心臓、実質的に肉を盛り込む袋状の表皮からなる心臓、もう一つの「肉心臓」は、文字通りの心臓・肉である。機転のきく猿は、咄嗟に、その「二つの心臓」説をでっちあげたということである。が、ゆきあたりばったりのデタラメではなく、やはり、それ相当の合理性に裏打ちされた珍説と言うべきである。賢い猿によって咄嗟に考案された「謀り方便説」と言うべきものである。図体ばかりは大きいものの、智慧が脆弱な鰐夫は、友人であった猿の巧妙なその「謀り方便説」に謀られて、妻の為に獲得していた筈の「猿の生肝」を喪失することになったというわけである。

### むすびにかえて

さて、インド説話「猿の生肝」は、ご承知の通り、妻の希望を容れて、夫が友人を殺してその心臓を食す、あるいは、心臓を食すために友人を殺そうとする話であり、結果的に未遂に終わったものの、男同士の友情が壊れてしまうというある意味生々しくも悲惨な物語である。インドではよくある教訓説話集と分類される『パンチャタントラ』にも収録され、その他、大同小異の委曲を以て、種々の説話集にも収録されている。また、「仏伝」や「ジャータカ」など

---

いて、*sūnya* という形容詞の意味を A [が非存在であることによって]「空っぽの *sūnya*」B である、と説明することになっている。A は「非存在」、B は「存在」。*sūnya* という形容詞は、存在する B の様態を説明する形容詞である。さすがに、われらが『漢訳対照 梵和大辞典』の *sūnya* の項目 (1343 頁) は明解である。「非存在」という訳語は使うものの、「(—) のないまたは存在しない」や「(—) の非存在」である。今の *sūnya-hṛdaya*、即ち「(—)」の場合とは決定的に違うのである。*hṛdaya*「心臓」は存在する、『パンチャタントラ』は、所有複合語 *Bahuvrīhi* の形容詞として、「空っぽの心臓を持つ」であり、(1d) の田中・上村 [1980] の「心臓の無い」ではない、辛うじて (1c) の宗訳が「美味な心臓を持たずに心臓が空っぽで」が合格である。「心臓が空っぽで」と言われる一つの心臓と、現在持ち合わせない第二の「美味な心臓」を底本たる Hertel [1908] の (iii”) を踏まえて辛うじて訳文に移していることが、見てとることが出来るだろう。

インド説話「猿の生肝」を哲学する—sūnya-hṛdayaの語義解釈を中心に—(金沢) (15)

の仏典にまで収録されているというのである。説話集の作者は、この「猿の生肝」の物語から、読者にどのような教訓を得てもらいたいと考えていたのだろうか。うっかりすると『パンチャタントラ』では、巻1「友の離反」に帰属する話と勘違いしてしまうほどである。だが、「獲得されたものの消滅」の巻の主話であると知ると、獲得されたのは友人のことであり、せっかく得られた友人も、ちょっとした愚かな振舞いで失ってしまうものだよと考えることも出来るが、おそらくこの場合の「獲得されたもの」labdhaというのは、妻の希望する「猿の生肝」そのものであって、夫が獲得した「猿」という友人(ないし、その友人との友情)ではないのであろう。友人を騙して水上でまんまとその身柄を拘束することが出来た、即ち目的の「猿の生肝」を獲得出来たのに、愚かしい最後の振舞いで、それを取り逃がしてしまったことを指しているのであろう。しかも「人生の高邁な理想／目的を達成し損なう」という話ではなく、愚かしさ故の、「強盗や窃盗や詐欺の類いのいわば犯罪を成就し損なう」という教訓話と言うべきである。それがあちこちで引っ張りだこということである。鰐夫の「人の好き」＝「愚かしさ」に較べて、その友人たる猿の「機転」＝「賢さ」が強調されている。件のある「ジャータカ」では、猿は菩薩であり、馬鹿な鰐夫はデーヴァダッタだったりする。田中 [1952]、『インド民話集』では、その巻頭の第一話を「猿の生肝」が飾っている。

そもそもインドに種々に伝わる「猿の生肝」説話とは、生き物の生肝(心臓という内臓)を食べたくて友人を騙して殺そうとする話である。鰐夫は、妻の「猿の生肝」を食したいという途方もない我儘(ないし病気)に応えるべく、「①あらゆる生き物は、生肝なしには生きながらえることは出来ない(死ぬしかない)」「②生肝は一つしかない」という常識を前提に(友人の猿の生肝奪取／猿の殺害)計画を立て、その計画に基づいて実行する、そしてその企てはみごとに成功したかに見えたが、その土壇場で、友人の猿が捻り出した虚偽の「①生肝がなくても生きながらえることが可能である」ないし「②生肝は二つある」珍説にみごとに騙されて、せっかく掌中にした「猿の生肝」を失うことになり、同時に、猿という友人をも失うことになったという悲しい物語である。この物語の根底には、鰐夫の猿への友情(友人の猿を失いたくない／殺したくない)があったことを、われわれは看過すべきではないのではないか。最後の猿が鰐

(16) インド説話「猿の生肝」を哲学する—śūnya-hṛdaya の語義解釈を中心に— (金沢)

夫へ放った決別の言葉よりするならば、鱈夫と猿の間の友情／友人関係は束の間の絵空事、文字通りの幻想であったと言うべきである。だが、賢い猿の決別の言葉はどこまでも鱈夫の低能ぶりをあざ笑うものであったにしても、「猿を殺さずに済む」という猿の珍説にすぎり、結果的に猿を殺さずに済んだ、そのお馬鹿にして哀れな鱈夫に対しては、やはりどうしてもそこはかかない同情を禁じ得ないのである<sup>23</sup>。最後に蛇足のような<総括>を附しておきたい。この<総括>によって、śūnya-hṛdaya が、a-hṛdaya と同様の、「心臓が無い」という意味だとすると、「心臓 2 個説」hrdaya-dvaya は成り立たないことが明白であろう。「空っぽで、美味でない心臓」であれ、とにかく、心臓 1 個は体内に所持しているのである。『パンチャタントラ』のこの śūnya-hṛdaya の用例に対して「心臓が無い」とか without the heart とか heartless とか sans coeur などの訳語を与えた人は、果たして物語を読んでいるのだろうか。言うまでもなく、「哲学する」とは「物語を物語として読む」ことである。(了)

<総括> 「猿の生肝」説話：水中（上）の猿の心臓の個数について

《謀り方便説 1》・・・Pt

hrdaya-dvaya

\*心臓 2 個(体内 1 個: śūnya-hṛdaya、体外 2 個目: dvitīya~hrdaya)⇒心臓 2 個説  
《勝義説》

\*心臓 1 個(体内 1 個: hrdaya)

⇒心臓 1 個説

《謀り方便説 2》・・・Mv, Kss, J, 今昔、沙石

\*心臓 1 個(体内 0 個: a-hṛdaya、体外 1 個所持: hrdaya)

⇒心臓 1 個説

~~~~~波線部は有り得ない虚偽

<sup>23</sup> 本論攷の趣旨とは関係ないが、この「猿の生肝」説話の教訓に言及してしまったのであるから、参考までに、今昔物語の全訳注を刊行している国東文麿氏の見解を紹介しておくべきかと思う。氏は「本話は、亀と猿とがたがいに自分の必要から相手をだまし、だまされる話、すなわち、だましくらべ(知恵くらべ)の話である。だから、だましくらべのやりとりと、それによる事の経過のおもしろさがあれば、これをあえて教訓に結びつけなくても、それなりの興味において話は成り立ちうるが、本話は寓話として、だましと失敗を動物の「墓無」さ、すなわち浅はかさにとらえたうえ、仏教でいう人間の「愚痴」(三毒・十悪の一)を戒める譬喩談としている。」(国東 [1981] 301 頁)と、はっきりと記している。



インド説話「猿の生肝」を哲学する—sūnya-hṛdaya の語義解釈を中心に— (金沢) (17)

【略号・参考文献】

Bühler, G.

[1891]: *Pañchatantra IV. & V. (4th Ed.)*, Bombay.

Hertel, J.

[1908]: *The Pañchatantra, a Collection of Ancient Hindu Tales in the Recension, Called Pañchākhyaṇaka, and Dated 1199 A.D. of the Jain Monk Pūrṇabhadra*, <HOS.11>, Cambridge (Mass.).

Kale, M.R.

[1912//2008]: *Pañcatantra of Viṣṇuśarman*, Delhi.

Olivelle, Patrick

[2006]: *The Five Discourses on Worldly Wisdom by Viṣṇuśarman*, <Clay Sanskrit Library>, n.p.

Ryder, A.W.

[1925/1955]: *The Panchatantra, Translated from the Sanskrit (6thEd.)*, Chicago.

Schmidt, Richard

[1901]: *Das Pañcatantram (Textus ornatiore), Eine altindische Märchensammlung, zum Ersten Male übersetzt*, Leipzig.

Senart, É.

[1890] : *Le Mahāvastu, Tome Deusième*, Paris. (名著普及会 1977)

岩本裕

[1963] : 著『インドの説話』紀伊國屋新書

[1964] : 著『仏教説話』筑摩書房

[1978] : 著『仏教説話の源流と展開』<仏教説話研究 2 >開明書院

[1982] : 著『インドの昔ばなし』法蔵館

金沢篤

[1991] : 「シャンカラと hṛdaya」『<我>の思想』春秋社

[1998] : 「カーマの矢—インド愛神考序説—」『駒大佛教學部研究紀要』第 56 号

[2006] : 「蘇生と再生—「すげかえられた首」再考—」『駒大佛教學部研究紀要』第 64 号

[2009] : 「猿の心」『駒大佛教學部研究紀要』第 67 号

[2017] : 「ダマヤンティーの愛—bhakti の意味を尋ねて—」『駒大佛教學部論集』第 48 号

上村勝彦

(18) インド説話「猿の生肝」を哲学する—sūnya-hṛdaya の語義解釈を中心に— (金沢)

[1980]: 訳『屍鬼二十五話』東洋文庫: 平凡社

[2004]: 著『始まりはインドから』筑摩書房

国東文磨

[1981]: 訳注『今昔物語集 (五)』講談社学術文庫

宗茅生

[1965]: 著『梵語直訳印度古譚 五章の物語』平凡社

高倉輝

[1929]: 著『印度童話集』<日本児童文庫>アルス

田中於菟弥

[1952]: 編『インド民話集』市民文庫 (河出書房)

[1959]: 訳『インド童話集』あかね書房

田中於菟弥・上村勝彦

[1980]: 訳『パンチャタントラ』<アジアの民話 12>大日本絵画

筑土鈴寛

[1943]: 校訂『沙石集 上巻』岩波文庫

辻直四郎・渡辺照宏

[1956]: 訳『ジャータカ物語』岩波少年文庫

中村元

[1988]: 編著『仏教動物散策』東京書籍

平岡聡

[2010]: 著『梵文『マハーヴァストゥ』全訳 ブッダの大いなる物語 上』大蔵出版

本田義央

[2011]: 「説話集編纂者の説話理解—猿の生肝の説話を題材として—」『比較論理学  
研究』第9号<広島大学比較論理学プロジェクト研究センター研究成果報告書報  
告 (2011) >

松村達雄

[1925]: 編著『世界童話体系 第十巻 印度篇』世界童話体系刊行會

山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄

[1959]: 校注『今昔物語 一』<日本古典文学大系 22>岩波書店